

日中・アジア太平洋戦争期のモンペとファシズム

森 理恵

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

「モンペ¹」について日本語の辞典類ではたとえば次のように説明されている。

山袴の一種。もんぺの名称が全国的に一般化したのは、第二次世界大戦中に婦人標準服の活動衣として着用が奨励されてからである。それ以前は主として東北地方および一部農山村地帯の農民の労働着、あるいは日常の家着として男女にかかわらず着用されていた。(後略)(日浅1994、776)

山袴の一種で、日本特有の脚衣の一つ。(中略) いつごろから用いられ始めたか明確にしがたい。上部がゆるやかな形のため、着物の裾を中に入れて着装することができ、活動的で保温性も高いという利点から、農山村での労働着として普及した。第2次世界大戦中は、家庭婦人の作業衣や防空着として都市においても着用され、二部式標準服としてもんぺの呼称とともに全国に普及した。(後略)(景平1980、407)

はかまの一種。むかしは武士が旅するときに用いたが、今では仕事着としてとくに農家や山村の女性に用いられている。第二次世界大戦中は防空活動に適するといふので、婦人の常服となったこともある。(田中1969、867)

一方、韓国文化財保護協會編集の『韓國의服飾』(韓国の服飾)で、朴京子は、1940年代に第二次世界大戦が激しくなると、韓国女性が戦時服としてチマの上に日本の作業服であるモンペを着るようになったことを述べている(朴1982、437)。また同書で白英子は、戦争末期に一斉に着られたモンペが、戦後には着られなくなったことを述べている(白1982、489)。

英語の辞典類を参照すると、*Berg Encyclopedia of World Dress and Fashion*では、“Overview of Japan”の項で、日中・アジア太平洋戦争末期に軍需工場に動員された女性が、農民が着ていたゆったりしたズボンであるモンペをはいたことが述べられている(Van Assche, 2010, 352)。また同書の“Overview of Korea”の項では日本の植民地支配を受けた時期にモンペなどの日本服を着ることが強制されたが、解放後には愛国心から着られなくなったとしている(Kim, 2010, 321)。さらに、*The Berg Companion to Fashion*の“Japanese Fashion”の項では、第二次世界大戦後、米国の影響で日本女性はモンペを西洋風のスカートに着替えた、とする(Kawamura, 2010, 436)。

以上をまとめると、モンペは、由来についてははっきりしないものの、日中・アジア太平洋戦争²の時期に女性のあいだで普及し、植民地朝鮮でも女性に用いられたということになる。そうしたことを受けてか、現在、同戦争を扱った映画やテレビドラマなどでは、定番のようにモンペ姿の女性が登場する。また戦後は「モンペから洋服に着替えた」のように表現されることも多い。

しかしながら、枝木妙子も述べているように(枝木2019、15-16)、戦後もモンペは着用され続けている。服飾デザイナー・教育者の大塚末子(1902-98)は戦後もモンペを愛用したし(大塚1988、21、104)、조우현と김미진は、朝鮮戦争後の1955～56年に米国軍が撮影したカラースライドの分析により、

この時期に女性が労働着としてモンペを着用していたことを明らかにしている（조, 김, 2015）。大塚末子と同世代の服飾デザイナー・教育者の田中千代（1906-99）が1969年に『田中千代服飾辞典』の初版で、「いまでは仕事着として…用いられている」と、述べていることも重要である³。モンペが戦争中に普及したことは確かであろうが、戦後に着用されなくなったわけでは決してない。さらに、現代においても日本や韓国では、主に中高年女性の家庭着・労働着として、モンペは着用され続けている⁴。

本稿では、日中・アジア太平洋戦争期に普及し、現在では同戦争と結び付けられることの多い女性用のモンペについて、その普及の理由を、戦時期の日本で支配的であったファシズムの思想的特質から明らかにすることを目的とする。

（2）先行研究

井上雅人は、日中戦争開始より7年も前の1930年に既に、陸軍被服協会の機関誌『被服』で「国家総動員の暁」には「婦人作業班」の作業着としてモンペの利用が考えられると提案されていたことを明らかにしている（井上2001、221-223）。しかし、その約10年後の「婦人標準服」をめぐる議論においては、女性にズボン状のものを履かせることに対する嫌悪から、多くの論者がモンペの採用に難色を示したという（同、172-178）。井上は、1943年以降、連合軍の空爆が本格化していくなかで、美的観点から敬遠されていたモンペが、「女性が思いのままに身体を活動させることができる」という身体感覚の変化により普及していったと結論づけている（同、231-233）。

一方で、尾崎（井内）智子は、1930年代の生活改善運動で野良着の改良が進められていくなかで、女性用のモンペが普及するのと同時に、さまざまな名称のあったヤマバカマ型下衣（モンペを含む足が分かれた労働用脚衣）について「モンペ」という名称の定着も進んでいったことを明らかにしている（尾崎2016、51-53）。尾崎は、日中・アジア太平洋戦争期にモンペが普及した理由について、「一九三〇年代に行なわれた改良野良着の普及が受容の下地になった」ことを指摘する（同、52）。また、歴史的に女性がヤマバカマ型下衣をはかない地域では、戦争中にもモンペの普及が進まなかったことも明らかにしている（同）。

さらに、枝木妙子は、上記の研究を踏まえたうえで、読売新聞、朝日新聞、『婦人画報』の記事分析から、次の点を明らかにしている。まず1920～30年代に農村で普及していく過程で、都市部の人々にとっては、モンペが農村の女性と強く結びつけられていき、勤労の象徴となったこと（枝木2019、16-18）。1937年の関東防空大演習を契機にモンペが都市部の女性にも普及していったこと（同、18-19）。そして、それ以降、都市部の女性の間でモンペが普及していくなかで、モンペが洋装化し、ファッション性を備えていった点である（同、19-22）。枝木は都市部の女性の間でモンペがファッション化した理由について、野良着が洋装化していたにもかかわらず、「伝統的」な「勤勉さ」というイメージを保っていたこと、田舎の野良着を美しく女性らしいとする意識があったこと、「モガ」へのネガティブな印象、洋装化への抵抗、などがあったとしている（同、22）。枝木は、モンペ普及の理由の一つを、洋装化しファッション化したモンペそのものの変容に求めていると考えられる。

飯田未希は、戦後のアメリカ化のなかで一挙に日本女性に洋装が広まった、とする歴史観を批判する立場（飯田2020、265）から、戦争末期にも実はモンペはそれほど普及していなかったことを明らかにしている。また、日中・アジア太平洋戦争中の女性の服装を「戦時に相応しい」＝「正しい」服装」と個人主義的な「おしゃれ」・「ファッション」に二分し、モンペを前者に割り当てる（同、115～116）。そのうえで、枝木が洋装化・ファッション化したモンペと位置付けるズボン式のモンペを従来のモンペと切り離し、後者に割り当てる（同、230-239）。そして、個人主義的な洋装美へのこだわりを「彼

女たち」の「闘い」であったとする（同、267）。

以上、管見の限りで近年のモンペに関する議論を概観した。尾崎や飯田が指摘するように、モンペは戦争末期にも、農村でも都会でも、現在考えられているよりも実は普及しておらず、現在の「戦時期の女性といえばモンペ」のイメージは、飯田がたびたび引用しているとおり、当時の新聞や雑誌における防空演習や、女子青年団等の勤労奉仕に関する、写真入り報道の影響が大きいのであろう。これらの写真で女性たちは制服のようにモンペを着用しているが、それ以外の生活の場面でどうであったかは不明である。しかしながら、そうした演習や勤労奉仕などの場面で、集団的意識を高揚させる仕掛けとして、モンペが存在したことは事実であると考えられる。

モンペがおしゃれ・ファッションであったのか否かという点に関しては、本稿では、ファッションでない衣服とそうでない衣服があるという立場はとらず、枝木のように、モンペが戦争末期にファッションとして普及したという考えに立つ。モンペがファッションであったからこそ、一部の女性たちに積極的に採用され、その背景としてファシズムがあったというのが本稿の主張である。

2. ファシズムの日本

日中・アジア太平洋戦争期の日本がファシズム国家であったのかどうかという問題について、主に英語圏での議論を参照する⁵。

Roger Griffinはファシズムに関する文献集成*Fascism*のなかで、日本について、「1936年11月に枢軸国側に加わったものの、その政権は保守エリート層が担っており、権威のよりどころを天皇の神性に置いているので、ファシズムとはかなり異なっている」と述べている（Griffin, 1995, 238、日本語訳は筆者。以下同）。Griffinはファシズムの条件として、1 反自由主義、2 反保守主義、3 カリスマ政治、4 反合理主義、5 ファシズム的「社会主義」、6 全体主義へのつながり、7 社会的サポートの不均質、8 ファシズム的レイシズム、9 ファシズム的インターナショナリズム、10 ファシズム的折衷主義の10項目を挙げる（同、4-8）。この条件のヨーロッパ中心主義については池田が指摘しているが（池田2020、34）、Griffinがファシズム国家と認定しているのはイタリア、ドイツのみである。そして、“abortive fascisms” すなわちファシズムの発達が途中でとまった地域としてイギリス、アイルランドなどのほか、非ヨーロッパ圏では南アフリカ、チリ、ブラジル、日本を挙げる。

しかしながら、日本の「天皇の神性」は、19世紀後半に、下層武士階級出身の政治家・思想家たちが意図的に造り上げたものであり、それ以降も政治家・思想家により政治的危機のたびに更新され続けている。Griffinはおそらく、天皇の神性を前近代から連続したものと捉えたと思われるが、そうではない。むしろ、天皇とそれにまつわる物語は、Griffinがファシズムの基盤として指摘する「神話的核」（Griffin, 1995, 3-4）に当たると考えられる。

*The Aesthetics of Japanese Fascism*という著書があるAlan Tansmanは、Griffinの議論に対して、「文化というレンズを通してみれば、ヨーロッパのファシズムに言えることが日本のファシズムにも当てはまる」とする（Tansman, 2009, 6）。TansmanはGriffinの「神話的核」に加えて、Mark Neocleusの「ファシズムは近代の脅威への反応として現れ、人々に、血と精神を通した自然の絆によって結ばれた国家と民族という神話を想起させることによって階級の分裂を終わらせることを約束する」という議論を紹介する（同、7）。戦時期の日本において、天皇制の万世一系神話が、上流・中流階級から労働階級までの各階級の人々に一体感をもたらし、アジアへの侵略戦争を正当化する大義名分となったことは言うまでもない。

さらに、ケネス・ルオフは、戦時日本国家がファシズムであるとする立場から、保守エリート層が担い

手である（からファシズムに当てはまらない）というGriffinの指摘について、天皇崇拜と国家の統合に関係した観光や消費、そして祭典における一般大衆層の熱狂ぶりを実証して反論する（ルオフ2010、34-39）。また、ヒトラーのようなカリスマがいない点については、神武天皇がそれに当たるとする（同、42）。なお、ファシズムを一般大衆が支えたという点については、吉見義明が早くから明らかにしている（吉見1987）。

本稿ではこれらの議論を踏まえ、日中・アジア太平洋戦争期の日本がファシズム国家であったとする立場に立つ。単に国家としてファシズム体制であったというだけでなく、吉見やルオフが指摘するように、一般大衆にもファシズムが浸透していたという考え方をとる。その観点から、以下にモンペの普及との関係を考える。

3. モンペとファシズム

筆者は以前に、モンペの特質について、全体主義との関連で考察した（Mori, 2020）。そこでは、モンペの次のような特徴を全体主義に適合的であるとした。すなわち、機能性と伝統性を兼ね備えた衣服であること、労働者階級の衣服を出自としていること、どんな素材でも簡単に作れること、ズボン式であるにもかかわらず女性的なラインを持っていること、の4点である。個人主義を認めず、出来るだけ多くの構成員を国家の目的、特に戦時においては戦闘や戦力増強のための食糧増産や兵器製造に動員しようとする全体主義国家にとって、機能的であり、労働の美德を重んじ、伝統や女性性という旧来の価値観と衝突しないモンペの特徴は、まさにぴったりの衣服であったと言える。

Jennifer Craikは*Uniform Exposed: From Conformity to Transgression*のなかで全体主義国家における制服の重要性を「世界中の全体主義国家はごろつきたちを統制された集団に変えるための制服の有用性を認識している」と指摘する（Craik, 2005, 38-39）。モンペは婦人標準服に採用されたとはいえ制服ではないが、防空演習や勤労働員で一斉に着用することで、女性たちに規律や統制、集団としての高揚感を与える役割を担ったと言えよう。また、Geraldine Howellは*Wartime Fashion from Haute Couture to Homemade*のなかで戦争中に活動の便利のために女性が用いた軍服式のズボンは「男性にとって性別越境の脅威となった」とする（Howell, 2012, 70）。モンペについても、第1章でみたとおり、ズボン型の脚衣に対する人々の忌避の感情は存在した。しかしながら、モンペはこの時期、男女両用のものでなく、女性専用のものとされたため、軍服型のズボンほどの抵抗感はなかったものと思われる。

以上の諸点が、日本の内地だけでなく、植民地や占領地⁶においても、防空演習や勤労働員で女性たちにモンペが推奨、または強制され、制服のように着用された理由であると考えられる。

ここにファシズムの思想的特質を重ね合わせると、さらにモンペの特徴が浮き彫りになる。

Harry Harootunianは「1930年代の日本の急速な近代化と資本主義化への応答として、人々は資本主義のまやかしの社会生活と見えるものから逃れようとし、純粋な真正性を求めたが、それは社会の歴史の変遷のただなかで歴史なき社会を確立することを可能にするものであった」とし、Slavoj Žižekを引用しながら「これは「資本主義なき資本主義」、あるいは、もっと親しみやすい言葉でいうとファシズムだ」と述べている（Harootunian, 2019, 202）。前章でもみたとおり、ファシズムは、資本主義の進展する近代化のなかで不安を覚えた人々が、神話的絆をよりどころに団結する反応である。そこでは、資本主義がもたらした階級格差は解消されたように見え、人々は神話に彩られた運命共同体のために奉仕し、自らの命さへ捧げ、あるいは自らの共同体の構成員でない人々の命を奪うことさえ厭わない。

その運命共同体に相応しい女性服がモンペだったのではないだろうか。尾崎が指摘するように、1920年代の生活改善運動のなかで普及が目指されたが、実際には必ずしもモンペは受け入れられなかった。にもかかわらず、枝木が指摘するように、モンペは「農村」や「勤労」と結びつけられた。1920～30年

代の日本では資本主義の進展に伴い、衣服の製造業・流通業が大いに進展し、日々新しいファッションが生み出されていた。それは洋服に限らず、いやむしろ、各百貨店の主力商品であった和服のほうが流行の変化は激しかった。目まぐるしいファッションの狂騒ぶりに疲れた人々は、農村にこそ、不変の「真の日本」の姿があると考えた。日中・アジア太平洋戦争期における民俗学、民芸運動の盛り上がりや民芸品の人気はそのことを裏付けている。

*Kingdom of Beauty: Mingei and the Politics of Folk Art in Imperial Japan*の著書があるKim Brandtは、「すべてのファシスト国家にとって民芸 (folk art) は、前近代の共同体の社会調和を思い起こさせるには申し分のない、民族固有の美的源泉として有用であった」と述べる (Brandt, 2009, 117)。モンペは東日本の農山村の労働着を由来としており、「農村」「勤労」のイメージを持っていたことから、用布も細かい縞模様などの民芸的な織物が使われることが多かった。これを枝木は洋装への接近として捉えており、それもあながち否定はできないが、本稿では、ファシズムのなかにある「民族固有の美的源泉」を求める思潮と関係があると考ええる。また、都会的、貴族的な出自ではないことから、モンペの美は階級の分断を超えるものとも捉えられた。第1章でみたとおり、枝木はモンペの普及について「伝統的」な「勤勉さ」というイメージ、田舎の野良着を美しく女性らしいとする意識、「モガ」へのネガティブな印象、洋装化への抵抗、などを指摘しているが、これらは同時期のファシズムの思潮と見事に合致する点である。現代においてモンペが戦時期と結び付けられがちであるのも、モンペのファッションとしての特徴がファシズムに当てはまるためであるとも考えられる。

西洋資本主義に先導された「まやかし」の軽佻浮薄なファッションから離れ、純粋な真正性、「真の日本」をあらわすモンペ・ファッションへ。ファシズム論者たちが言うとおり、実はそれも資本主義のなかの出来事ではあるのだが、モンペの採用者たちにとっては、モンペが資本主義や近代の産物、そして西洋の産物であるように見えないことが重要であった。日本精神が称揚され、「大東亜の新秩序」が唱えられたアジア太平洋戦争期にモンペに魅力を感じて身に着けた女性たちは、身体の動かしやすさや作りやすさだけでなく、その、「民族の美」をあらわすかのようなファッション性に惹かれたのではないだろうか。

ただし、日本の植民地や占領地で強制されたモンペの着用については、もっときめ細やかな考察が必要である。さらに、戦後も日本や韓国でモンペが着用され続けている理由は、もちろんファシズムからは説明できない。様々な視点の導入が必要である。これらの点については今後の課題としたい。

【付記】 本稿は、著者が、2021年7月29日・30日にデュッセルドルフのハインリッヒ・ハイネ大学で開催された“Gendering Fascism: Imaginaries, Media, Technologies (Online workshop organised by Andrea Germer and Jasmin Rückert, Heinrich Heine University, Düsseldorf, Germany)”において“Monpe: Perfect Women’s Attire for the Fascist State”という題目で発表した内容、および、2021年8月20日に京都大学東南アジア地域研究研究所で開催されたワークショップ「装いと規範」(オンライン)において「総動員体制下における『モンペ』の普及—思潮・文化としてのファシズムから考える」という題目で発表した内容の一部に、大幅に加筆修正したものである。

注

- 1 「モンペ」については、ひらがな表記や「もんぺい」などの表記もあるが、本稿ではカタカナ表記の「モンペ」を用いる。
- 2 本稿では、1937～45年の日中戦争、1941～45年のアジア太平洋戦争（太平洋戦争とも呼ばれる）をあわせて「日中・

アジア太平洋戦争」と呼称する。また、文中で単に「戦争」「戦時期」「戦後」と表記する場合は、この日中・アジア太平洋戦争を指す。

- 3 筆者がモンペについて何度か発表した際にも、20世紀後半のこととして、「日本にいたときホームステイ先の女性がモンペを愛用していた」、「母が家でモンペを愛用していた」などの感想を得た。
- 4 インターネットで「もんぺ」、または韓国語の「뽀빠이」で検索すると多くの商品が販売されている。
- 5 英語圏での日本ファシズムに関する議論を読むことができる日本語の文献として、池田2020、27-42、ルオフ2010がある。なお、日本語圏でのファシズム研究の潮流については大藪2020、高岡2004参照。
- 6 Mori, 2020では、植民地朝鮮、植民地台湾、そして1941～45年に日本軍の占領下にあったジャワでも、モンペの着用が強制ないし推奨されたことを明らかにした。また、植民地朝鮮のモンペについては井上2011参照。

参考文献

- 飯田未希. 2020. 非国民な女たち—戦時下のパーマとモンペ. 中央公論新社.
- 池田安里. 2020. タウンソン真智子・池田安里訳. ファシズムの日本美術 大観、靱彦、松園、嗣治. 青土社.
- 井上和枝. 2011. 農村振興運動～戦時体制期における朝鮮女性の屋外労働と生活の変化. 国際文化学部論集 11 (2-4) : 81-104.
- 井上雅人. 2001. 洋服と日本人 国民服というモード. 廣済堂出版.
- 枝木妙子. 2019. 非常服としてのモンペの＜流行＞—第二次世界大戦期の新聞や婦人雑誌の記事に着目して—, 立命館大学アート・リサーチセンター紀要19: 15-24.
- 大塚末子. 1988. もんぺ讃歌 生きて、愛して、おしゃれして. 主婦の友社.
- 大藪龍介. 2020. 日本のファシズム 昭和戦争期の国家体制をめぐって. 社会評論社.
- 尾崎（井内）智子. 2016. 農村生活改善による改良野良着の普及とモンペ. 東京大学日本史学研究室紀要20: 35-61.
- 影平一恵. 1980. もんぺ. 丹野郁編. 総合服飾史事典. 雄山閣出版.
- 高岡裕之. 2004. ファシズム・総力戦・近代化. 歴史評論645: 54-63.
- 田中千代. 1969. もんぺ. 田中千代. 服飾辞典. 同文書院.
- 日浅治枝子. 1994. もんぺ. 下中弘編. 日本史大事典第六巻. 平凡社.
- 吉見義明. 1987. 草の根のファシズム: 日本民衆の戦争体験. 東京大学出版会.
- ルオフ、ケネス. 2010. 木村剛久訳. 紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム. 朝日新聞出版. = Kenneth J. Ruoff. 2010. *Imperial Japan at Its Zenith: The Wartime Celebration of the Empire's 2,600th Anniversary*. Cornell University Press.
- Brandt, Kim. 2009. The beauty of labor: Imagining factory girls in Japan's new order. Allan Tansman, ed. *The Culture of Japanese Fascism*. Durham and London: Duke University Press.
- Craik, Jennifer. 2005. *Uniforms Exposed: From Conformity to Transgression*. Oxford: Berg.
- Griffin, Roger. ed. 1995. *Fascism*. Oxford: Oxford University Press.
- Harootunian, Harry. 2019. *Uneven Moments: Reflections on Japan's Modern History*. New York: Columbia University Press.
- Howell, Geraldine. 2012. *Wartime Fashion from Haute Couture to Homemade, 1939-1945*. London and New York: Berg.
- Kawamura, Yuniya. 2010. Japanese fashion. Valerie Steele. ed. *The Berg Companion to Fashion*. Oxford: Berg.
- Kim, Min-ja. 2010. Overview of Korea: modern. John E. Vollmer. ed. *Berg Encyclopedia of World Dress and Fashion vol. 6: East Asia*. Oxford: Berg.
- Mori, Rie. 2020. The monpe as a totalitarian costume: Japanese farmer work pants as a wartime uniform for women in the Japanese empire. Fedja Vukić and Iva Kostešić eds. *Lessons to Learn?: Past Design Experiences and Contemporary Design Practices -Proceedings of the ICDHS 12th International Conference on Design History and Design Studies*. Zagreb: UPI2M Books. 393-396.
- Tansman, Allan. ed. 2009. *The Culture of Japanese Fascism*. Durham and London: Duke University Press.
- Van Assche, Annie M. 2010. Overview of Japan. John E. Vollmer. ed. *Berg Encyclopedia of World Dress and Fashion vol. 6: East Asia*. Oxford: Berg.
- 朴京子. 1982. 일제시대 (日帝時代) 의 복식 (服飾) —1910년 ~1945년—. 韓國文化財保護協會編. 韓國의服飾. 韓國文化財保護協會
- 白英子. 1982. 해방 (解放) 후의 복식 (服飾). 韓國文化財保護協會編. 韓國의服飾. 韓國文化財保護協會
- 조우현・김미진 (Woo Hyun Cho and Mijin Kim). 2015. 'The Journey of Duty to Korea in 1954~55' 를 통해 본 한국패션 (Korean Costume Shown on "The Journey of Duty to Korea in 1954-55"). *Journal of the Korean Society of Costume*, 65 (7) : 129-144.